

善通寺収容所（広島第1分所）メモ （マーヴィン・ロスランスキーさんが収容）

1942年1月14日、善通寺捕虜収容所本所として、香川県善通寺町大字先野に開設。

1945年4月13日、広島捕虜収容所に移管、同第1分所となる。

1945年9月、閉鎖

●太平洋戦争開戦後、国内で最初に開設された収容所。グアム島やウェーク島、マーシャル諸島、ラバウル（ニューブリテン島）、フィリピン、ジャワなどで捕らわれた各国捕虜が、ピーク時には400人ほど収容されていたが、移動も多く、終戦時収容人員は110人（米104、NZ5、英1）。

●将校が多く、他の収容所に比べると待遇が良く、日本側からは“模範収容所”、捕虜側からは“プロパガンダ収容所”とみなされていた。

●使役企業は日本通運高松支店。下士官兵は高松駅構内や坂出港で荷役として働き、将校は大麻山の開墾作業に駆り出された。

●善通寺俘虜収容所長：初代＝水原義重少将（善通寺師団兵務部長との兼任）、2代目＝近藤玉衛大佐（のち広島俘虜収容所本所長）／広島第1分所長＝細谷雄平中尉（のち大尉）

●「模範収容所」と言われたが、それでも7人（所長、軍医、通訳、日通職員など）が戦犯として1～30年の刑を科せられた。

●収容所跡地は、現在の善通寺西中学校付近（善通寺市文京町4-1）

●収容中の死者10人（米7、英2、豪1）。陸軍墓地内に、昭和27年に民間人の横川敏雄氏（故人）が建てた捕虜の墓がある。（実際には10名の名前を刻んだ慰霊碑。遺骨は戦後母国や横浜の英連邦墓地に送られた）

●市内に住む大北文男氏は、戦中、市役所衛生課職員だった父の遺志を継いで、自宅の仏壇に死亡捕虜の名前を書いた位牌を供え、朝夕お経をあげている。



善通寺収容所



グラウンドで体操する捕虜たち



陸軍墓地内の捕虜の墓

（文責：笹本妙子）